

安土城天守閣「鳩の御絵」考

小林 千 草

太田牛一著『信長記』巻九「安土御天主之次第」によると、二重め（実質一階）の四十二畳敷の「次の間」（襖を開けばすぐ行ける）は、四畳敷の小部屋で、「御棚に鳩の御繪をかゝせられ」ていた。

「鳩の御絵」の描かれた「御棚」の解釈であるが、妙心寺天球院（一六三一年創建。障壁画には狩野山楽・山雪などが参画）の上間一の間におけるあり方を参照すると、「違い棚の奥面にある壁」(a)と「違い棚天袋」(b)の可能性がある。

天球院の場合、(a)には「虎溪三笑図」、直上にくる(b)には「菓子図」(四枚。桃、梨子、枇杷、葡萄)が描かれ、両者に脈略はないのであるが、安土城の場合は、「鳩」で統一されたと考えてよいであろう。

次に問題になるのは、どのような意味合いをこめてそこに鳩が描かれているかである。

今でこそ鳩は平和の象徴であるが、室町あたりではどうであったろうか。

神戸市立博物館蔵狩野内膳筆「南蛮屏風」の南蛮寺（キリシタンの教会、エケレジャ）の屋根には白鳩が教羽とまっているし、エケレジャの十字架の基部には鳩がまといついたり彫り物がなされている。それについては、聖霊（キリシタンの言う Spiritus Sanctus）の象徴としての意味づけを見出した（拙稿「内膳南蛮屏風の宗教性」『文科大学国際学部に紀要第2巻 一九九二年』参照）のであるが、信長の場合は、キリシタンに接したとは言え、そこまでの理解・心酔にまでは至っていないか、と思ったので、この線での具象化ではない。

鳩といえば、そのくぐもったような鳴き声と、そのふっくらとした胸が、日本人をとらえてきた。

茂りつつ木深き山の夕ぐれはこもり声にぞはとは鳴ける 藤原信実（新撰六帖・

二）

「むねが又さしでた」『はとむねで候へば』

（大蔵虎明本狂言「今まいり」）

第二例は、秀句（ジャレ）好きな大名のもとに奉公を願い出た新参者（今まいり）が、その身体的特徴を聞かれて答えているものである。

「はとの杖」などは、その原拠は中国で老臣をいたわるために宮中から下賜されたものであり、日本でも八十歳以上の者に下賜された（『日本国語大辞典』参照）らしいから、その

イメージは、いたわり・やさしさであろうが、室町人の場合、「どぼと」「土塊(どぶ)ばと」と称し、幾分、田舎びた、洗練されないイメージをもっていたふしがある。

『日葡辞書』を引くと、「はと」では立項がないが、

T'guchirebato. 雉鳩。

Dobato. 寺とか人家とかの屋根で飼われている鳩。

があげられている。「堂鳩(どう鳩)」の説明において「que le criaio」(飼われている)とあるのは、おもしろい観察である。現在ならフン公害でマンションや駅舎から追い払われるところが、追いやられず、時に、豆や米のおこぼれにあずかるという面を見つめた上での言及であろう。このような観察をなしたポルトガル人達は、日本の庶民はやさしいと思ってくれたのではないだろうか。

虎明本狂言に「餌差(ねま)ち」という、鷹の餌にする小鳥をもち棒で捕えることを職とする者を主人公にすえた曲があり、そこに、「くろつぐみ、つちくればとに、山ばとはたかのこのむときく物を」とある。

信長が「鷹狩り」を好んだことは、『信長記』をひもとけばすぐ了解される(拙稿「中

世を読む——大田牛一『信長記』より「十」鷹狩り)『歴史読本』平成四年十月号参照)が、鳩は、その生き餌とされた小鳥の一つである。

そのような視点から、次の間を見なおすと、又十二疊敷鴉をかゝせられ、鴉の間と申也。又其次八疊敷、奥四てう敷に雉の子を愛する所あり。(信長記・巻九)

となっており、鴉(がちょう、雁の一種)にしろ雉にしろ、鷹狩りの鷹の目標物であることに気づく。

つまり、信長の居間と考えられる安土城天守閣二重め西十二疊間(墨梅の間……この名称の由来・背景等については、「中世を読む」[九]安土城障壁画細見)『歴史読本』九月号参照)が、彼が象徴としての森羅万象と対話し、清楚な梅のかもし出すかおりに心を安める場所であるのに合わせて、そのつづきの間四つは、鳩・鴉・雉など自然界に普通に見られる生き物をいとおしむ場所であったのである。

おそらく、廻向をまかねて描かせたのであろう。

また、「雉の子を愛する所」を描かせた信長の深層を考えると、胸がいたむ。父母の愛

うすかった本人の夢を自然界に託したものであろうが、「雉の草がくれ」ということばにあるように、鴉や雉は、わが身を十分に隠せず危険を知らせるために鳴き、それが敵に殺される合図になるという口承を思いおこす時、策謀を弄することが日常茶飯事であった当時、「無償の愛」とは何かを、禅機を通すよりもすなおに教えてくれる画でもあったろう。

夢幻(ゆめまがし)のこの世で、鷹狩りだけではなく殺生をせざるをえなかった信長の、本当は、すべての生類をいつくしみたいという想いが満ちたのが、安土城西南のこの空間群であったと、私は考えている。

なお、鳩には、その愛くるしい様相からは想像されない「さびしさ」のイメージもあった。それは、「大和国まぢかくなりて、人ざとわずかにみえて、ふるきはたのそはに、はとのこゑおりからにや、心ばそくきこゆるに……ふるはたのそばのたつきにあるはとのともよぶこゑのすごきゆふぐれ」(徳川美術館蔵西行物語絵巻)に代表されるような、鳴く音色からもたらされるものが多い。